

貨幣の必然性 (Ⅱ)

—宇野理論の一検討—

尼 寺 義 弘

目 次

- はじめに
- I 貨幣の萌芽形態＝単純な価値形態
- II 単純な価値形態における等価形態の意義
- III 価値形態論＝交換過程論（以上、『阪南論集』第9巻第6号）
- IV A 単純な価値形態 より B 全体的な価値形態 への移行（本号）
- V B 全体的な価値形態 より C 一般的価値形態 への移行（以下次号）
- VI D 貨幣形態
- VII 価値形態論の方法
- むすび
- IV A 単純な価値形態 より B 全体的な価値形態 への移行**
- a) 宇野氏の移行の動力＝交換欲望
- b) 素材と経済的形態
- c) 単純な価値形態の必然性
- d) マルクスの移行の動力＝価値表現の不充分性
- e) 宇野氏の形態Ⅱは形態Ⅰの矛盾を解決しうるか？
- a) 宇野氏の移行の動力＝交換欲望**

以上のように、宇野氏等は、商品の価値は商品所有者の他商品の使用価

値に対する交換欲望として表現されるものとしており、価値形態論を交換過程論と同一視している。そして商品が「原則としては互に直接的には交換されないこと」¹⁾から、貨幣の必然性の論証は「積極的要因」と「消極的要因」²⁾あるいは「同質性」と「異質性」³⁾という商品の価値と使用価値との「矛盾」を担う商品所有者の交換欲望の拡大過程、いわゆる「価値形態の発展」によってなされねばならないとするのである。われわれは、つぎにその「発展」の第一歩である「簡単な価値形態」(以下、宇野氏等のものは、「形態Ⅰ」と略す——引用者)より「拡大された価値形態」(以下、宇野氏等のものは、「形態Ⅱ」と略す)への移行についてみることにしよう。

宇野氏は言われる。

「簡単な価値形態では、リンネル所有者の上衣にたいする交換欲望にもとづいて、リンネルの価値を上衣の使用価値によって表現した。しかしリンネルを商品として所有する者の交換欲望は、上衣のみに限定されているとはいえない。リンネル商品所有者はいろいろな量の種々の使用価値にたいして交換欲望をもつものとするのが当然である。そこでリンネルの価値も拡大された形態で表現されることになる。」⁴⁾

このように形態Ⅰより形態Ⅱへの移行は、「交換欲望」の拡大によってなされている。つまり商品所有者の交換欲望は、他の商品に限定されないで、他の多くの商品にむけられるということが移行の原動力となっているのである。^注

注

小林弥六氏は価値形態を価値の表現形態とはみないで、「交換のための様式の展開、価値実現の様式の措定」⁵⁾と考えられる。そして、形態Ⅰでは「商品の交換がおこなわれる可能性は少なく、商品は価値でありまた使用価値であるものとして実現されることが困難であり、商品はみずからの運動形式を獲得していない。したがって、価値形態はなお不十分なものとどまらざるをえず、より発展した価値形態の形成が要請されるのである。」⁶⁾そして、「より発展した価値形態」への移行の動力を商品所有者の「交換性向」に求められて、つぎのよ

貨幣の必然性(Ⅱ)

3

うに言われる。

「リンネル所有者は交換をおこなうために交換に提供するリンネルの量を変化させることがあるが、さらに上衣を交換の対象とするだけでなく、ばあいによってはなんらかの他の商品と交換にみずからのリンネルを提供してもよいと思うかもしれない。なぜならリンネル所有者は上衣にかわって交換の対象となりうる他の商品をさがす可能性も大きいからである。またこれとは別に、リンネル所有者は上衣のほかいろいろな商品を交換によって獲得しようとするかもしれない。このような交換性向はとうぜんいくつかのリンネルの価値方程式をつくりだす。」⁷⁾

永谷清氏は、形態Ⅰを「日常的な直接的使用価値」、たとえば「食料品」、
「衣類」などに対する商品所有者の「日常的欲望」にもとづく価値表現とされる。そして形態Ⅱを「日常それがなくとも生活にはさしつかえないような、より間接的使用価値」である「奢侈の商品」に対する「奢侈的欲望」⁸⁾にもとづく価値表現であるとされる。したがって、商品所有者の価値表現が「日常的な直接的な欲望から」「次第に」「解放されてゆく」ことによって、それが等価形態の商品の使用価値に対して「『無関心』にすこしずつ近づいている」⁹⁾過程を価値形態の「展開」とするのである。このように永谷氏は欲望の変化、つまり「日常的欲望」から「奢侈的欲望」への変化に価値形態の移行の動力をみい出されるのである。

日高普氏も「全面的な交換性を要求する商品の価値が、ある特定の使用価値だけで表現されるにとどまるものでない」¹⁰⁾として商品所有者の欲望にもとづいて「拡大された価値形態」へ移行される。

大内秀明氏は、「冒頭商品を資本主義的商品」とし、「価値形態の展開」を「歴史的な単純商品による交換の歴史的拡大・発展を手がかり」¹¹⁾とせず、あるいはまた価値の実体規定にもとづく「転倒の論理」¹²⁾にもよらないで、「資本主義的商品そのものによる価値の表現形態」¹³⁾の展開過程としなければならないとしている。そして商品の「価値は、自己の使用価値についてはいうにおよばず、他人の使用価値をも自己目的とせず、単に使用価値を手段とするにすぎないものとして、全面的に交換を要求する商品の性格」¹⁴⁾であるから、「もともと『上衣、鉄、小麦、そのほかなんであるかは、まったくどうでもいい』という性格をもっている。そこで価値は、他人の商品で、とりわけその使用価値量で表現されなければならないがゆえに形態Ⅰを必然的なものとするが、しかし、価値の表現であるがゆえに、形態Ⅰにとどまることなく、形態Ⅱに必然的に発展しなければならないというのである。ここでは明らかに、形態Ⅱを形態Ⅰの単なる『総和』、単純な組合せとするのではない。また、交換の事実的

4

阪南論集 第10巻第1号

発展に手がかりをもとめるのでもないであろう。明らかに価値対象性そのものに、形態Ⅰから形態Ⅱへの展開の必然性がもとめられているのである。」¹⁵⁾

このように、大内氏は商品の価値の積極性を強調することによって、使用価値を価値のたんなる手段として形態Ⅱへの移行を実現しているのである。したがって「商品所有者の欲望の拡大をいい、交換の拡大過程をもち出す必要はない」¹⁶⁾とされる。

鈴木鴻一郎氏は「『移行』の契機」を、実体規定を前提することなく、しかも欲望の拡大ではなくて、形態Ⅰの「不充分性」に求められている。その論理は「おのずから」「移行」するのではなくて、「これまでの論理的展開のいわばぎりぎりの限界点を指摘することにより、これを橋渡しとして、はじめて次の論理に移りうる」¹⁷⁾としている。そして「不充分」とは「『矛盾』の設定」¹⁸⁾であり、形態Ⅰのそれは商品Aの価値が商品A自身の使用価値から「十分に『区別』しきっているとはいえない」¹⁹⁾点に求めねばならないとしてつぎのように言われる。

「『簡単な価値形態』とは、じつは、『拡大された価値形態』における多数の『等価商品』にみられるように、使用価値としての区別がまだ明確に設定されておらず、したがって『等価商品』が単に一つの使用価値によって、代表させられている形態にはかならないのである。そしてまたこの点に、『簡単な価値形態』では『等価商品』についての『選択』の関係がまったく存在せず、『偶然的』でしかないということの理論的意味があるのであり、その『不充分性』があると考えられるのである。」²⁰⁾

つまり、形態Ⅰの「不充分性」とは、「等価商品」に単に一つの使用価値がくることから、形態Ⅱのように「選択」する関係、つまり「その商品と他の商品とを比較する関係」²¹⁾が「設定」されていないことにあると言われる。

中野正氏は進展の動力について言われる。「要するに、価値形態一般は、諸商品が相互に直接に交換されえないことの設定と同一であり、商品形式がほんらい私の商品にとって直接的な《quid pro quo》のかたちがありながら、自立の商品が直接社会的なもの否定態であって、個々の『諸商品が相互に直接に交換されうる形態をもたない』という矛盾こそ、簡単な価値形態から貨幣形態への進展の、真の動力とみなければならないのである。」²²⁾

このように各論者は、移行の動力を、商品所有者の「交換性向」の拡大、あるいは商品所有者の「日常的欲望」から「奢侈的欲望」への欲望の変化、あるいは価値が「全面的に交換を要求する商品の性格」であるから「等価商品」は単一でありえないこと、あるいは等価商品の「偶然」性にもとづく価値表現の

貨幣の必然性(Ⅱ)

5

「不充分性」、あるいは「諸商品が相互に直接に交換されうる形態をもたない」矛盾、等々に求められている。

さらに、注意すべきことは、宇野氏は『資本論』で価値形態の第二の形態を「B 全体的な、または展開された価値形態」（以下、マルクスのもものは、B と略す——引用者）としているのを批判して、「簡単な価値形態」のつぎは「全体的な価値形態」ではなく、「拡大された価値形態」としなければならないと言われるのである。つまり氏によると、価値形態は商品所有者の欲望によって規定されるものであるから、「その欲するだけの商品体を等価物とすることができる」²³⁾ だけであり、「あらゆる商品体が等価物となるというわけではない。いかえれば『拡大せる価値形態』は同時に『総体的価値形態』であるわけではないのである。」²⁴⁾ このように、価値形態の第二の形態においても、交換欲望の役割を強調されるのである。注

注

小林弥六氏も、宇野氏と同様に「交換の対象物」は商品所有者の「交換性向」あるいは「要求」によって「限定」されており、第二の形態は「拡大された価値形態ではあっても、全体的な価値形態であるわけではない」²⁵⁾ とされる。

永谷清氏も、同様に「全体的」を否定されて言われる。「亜麻布商品所有者の欲望に依存する価値表現であってみれば、『等価商品』は『無限の序列』ではなくて、むしろ有限の『序列』になる。使用価値に対する欲望である以上、その『拡大』には限度があると考えねばならないし、また無限に他商品をもとめるほど彼が無限の亜麻布商品をもっているとは想定できないからである。」²⁶⁾ 日高普氏も言われる。

「リンネル所有者の欲する商品が多くなれば、その表現はますます拡大されるであろうが、しかしそれはけっしてあらゆる商品におよぶものではなく、したがってその価値を十分に表現することもできない。」²⁷⁾

このように各論者とも交換欲望の有限性にもとづいて、「拡大された価値形態」としている。

これに対して、同じく宇野氏の主張に組みしている大内秀明氏は、次のような理由から「全体的な価値形態」と言われる。氏によれば、商品の価値は「使

6

阪南論集 第10巻第1号

用価値を自己目的とせず、したがって全面的交換を要求する社会関係²⁸⁾ であり、「形態Ⅱは、等価形態にたつ商品の使用価値で表現されるにもかかわらず、価値の表現であるがゆえに、その使用価値種類には無関心であり、したがって『無限の』使用価値種類で表現されるという点に、その特徴がみとめられているといっていであらう。」²⁹⁾ だから「形態Ⅱ」は「全体的な価値形態」であり、「有利なものを選択するという可能性」³⁰⁾ がある価値形態であるとしている。

鈴木氏も形態Ⅰの「偶然」性に対して、形態Ⅱでは「選択」の余地が入ってくると言われる。

「『簡単な価値形態』では、『リンネル商品』の価値は『リンネル商品』とは異なる。たとえば『上衣』という特定化されない一商品の使用価値に等しいものとされているわけであるが、『拡大された価値形態』にあつては、『リンネル商品』の価値は、すでに、『上衣』とか、『茶』とか、『コーヒー』とかいう特定の使用価値に等しいものとなっているのであり、『偶然』ではなくて『選択』の余地が入ってきているのである。」³¹⁾

氏の場合、「選択」を言われる以上、形態Ⅱを「拡大された価値形態」とせずに「全体的価値形態」とすべきであらう。

このように、形態Ⅰより形態Ⅱへの移行においても、形態Ⅱにおいても交換欲望が動力となり、かつ基礎となっているのである。

- 1), 2) 宇野『資本論の経済学』岩波新書。1969年。107頁。
- 3) 宇野『講座原論』30頁。
- 4) 同書 40頁。
- 5) 小林弥六『流通形態論の研究』79頁。
- 6) 同書 101頁。
- 7) 同書 108頁。
- 8) 永谷清『資本主義の基礎形態』107頁。
- 9) 同書 108頁。
- 10) 日高普『経済原論』17—19頁。
- 11) 大内秀明『価値論の形成』181頁。
- 12) 同書 197—200頁。
- 13) 同書 181頁。
- 14) 同書 169頁。
- 15) 同書 204頁。
- 16) 同書 203頁。

貨幣の必然性(Ⅱ)

7

- 17) 鈴木鴻一郎『価値論論争』181頁。
- 18) 同書 255頁。
- 19) 20) 同書 257頁。
- 21) 同書 188頁。
- 22) 中野正『価値形態論』328—329頁。
- 23), 24) 宇野『経済学方法論』203頁。
- 25) 小林 前掲書 108頁。
- 26) 永谷 前掲書 102頁。
- 27) 日高 前掲書 18—19頁。
- 28) 大内 前掲書 186頁。
- 29), 30) 同書 205頁。
- 31) 鈴木 前掲書 187頁。

b) 素材と経済的形態

以上のように、宇野氏が交換欲望を強調されるのは、商品所有者の交換欲望にもとづく価値形態の発展を、生産物交換の歴史的拡大過程、つまり「『商品世界』を形成する途を開く」¹⁾過程と考えられているからであろう。注

小林氏は価値形態の展開と交換過程の関係についてつぎのように言われる。「価値形態の展開は個々の商品のなかの価値を前提としていわば実体的におこなわれるのではなく、商品価値の具体的形態をこれから措定していく過程である。これは商品と商品との社会関係の発展にもとづくが、この社会関係の形成は価値と価値の等置によるのではなく、他人の商品と交換に自分の商品を交換しようとする商品所有者の判断にもとづくのである。ひとつの使用価値を他の使用価値と結びつけるのに、商品所有者の欲望なり判断なりがはたらく。」²⁾

つまり、氏は商品所有者の欲望や判断が商品の社会関係を形成するものであり、したがって、価値形態を展開せしめるものであるというのである。このように、氏は「商品所有者の欲望なり判断なり」にもとづく交換過程を、価値形態の展開を「措定していく過程」としている。

野口建彦氏は形態1「リンネル20=レ=上衣1着」を「交換による利得獲得欲望の動機をもつ亜麻布所有者とそれに応じた上衣所有者の間にとり結ばれた実在的・具体的な交換関係の表現形式であり」³⁾、「結局そうした欲望動機をもって交換活動を行なう人間の、みずから所有する財を基準とした交換利得の

8

阪南論集 第10巻第1号

獲得行動にほかならない」⁴⁾とされる。したがって、形態Ⅱは「リンネル所有者が、みずからのさまざまな交換利得獲得欲望をその序列集団のさまざまな財の所有者との間に実現してゆく過程を示すものとなろう。」⁵⁾としている。

このように価値形態の展開を「利得獲得欲望」の実現過程としているのである。そしてそれは「商品交換を拡大する」過程であり、「人間社会に対して“開いた体系”なのである」⁶⁾とされる。

われわれは、商品所有者の交換欲望の拡大が、商品交換の拡大に果している役割をいささかも軽視するものではない。交換欲望が商品世界の形成に果す意義は重要なものであろう。そして価値形態の論理的な展開は、交換欲望の拡大にもとづく生産物交換の歴史的拡大過程に照応しているものであろう。だが論理的展開は歴史的発展に照応してはいるが、歴史的発展そのものではけっしてありえない。注 価値形態論は全面的に交換されあっている商品、「完全に発展した商品」⁷⁾を抽象、分析して一商品と他の一商品との交換関係に対象を純化し、その交換関係に含まれている商品生産者相互の社会的生産関係の側面、つまり価値の実体規定にもとづく同等待関係としての価値関係の「質的側面」⁸⁾から考察しているのである。つまり社会的関係としての商品の価値が「いかにして」⁹⁾他商品の使用価値で表現されるのかということ、そして価値表現を構成する両極の商品の経済的形態規定性の区別、とくに等価値形態の商品の使用価値の担う独自の役割を論究しているのである。

注

価値形態論の論理的展開は商品交換の歴史的発展に照応していることは明らかであろう。マルクスはたとえば、A「単純な価値形態」が「実際にはっきりと現われるのは、ただ、労働生産物が偶然的な時折りの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことである」¹⁰⁾とし、Bが「はじめて実際に現われるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的にはなくすでに慣習的にいろいろな他の商品と交換されるようになったときのことである」¹¹⁾としている。

だが、これはあくまで論理と歴史との照応であって両者は同一のものでありえない。価値形態論は、全面的に交換されあっている商品の価値の貨幣形態

貨幣の必然性(Ⅱ)

9

を抽象し、たんなる商品と商品との関係に純化して、それを分析することによって、商品の価値が「いかにして」現われるかを論究しているのだから、けっして労働生産物の商品への歴史上の転化過程そのものを考察しているのではありえない。もしも転化過程そのものであるとすれば、交換が偶然的で臨時的なものである以上、欲望から価値表現がけっして解放されていず、宇野氏の主張するように価値表現が欲望の表現と同じものとなることになる。マルクスは逆に等価形態の商品が欲望の対象でないことを強調しているのである。

価値関係に対して、商品の使用価値に対する交換欲望の関係は「交換の素材的動機」¹²⁾あるいは「現実の交換関係の形成動機」¹³⁾であり、したがって超歴史的関係あるいは自然的関係であり、商品社会に独自の「経済的質」である生産関係を表示するものではありえない。だからこそマルクスはこの欲望の関係を捨象して、価値形態論を展開しているのである。この価値関係と欲望関係を混同している経済学者を皮肉ってマルクスはつぎのように述べている。

「経済学者たちが、素材に対する関心ばかり強すぎて、相対的価値表現の形態内実を見落したのには驚くに足りない。なぜなら、ヘーゲル以前には、専門の論理学者たちでさえ、判断例と推理例の形式内容を見落したのだからである。」¹⁴⁾

このように「素材に対する関心」、つまり他商品の使用価値に対する欲望の関係は、価値表現の「形態内実」、つまり価値関係に含まれている価値表現を構成する二商品の経済的形態規定性とは無縁のものである。価値形態論は素材的関係を問題とするものではなく、価値の表現形態そのものを対象としているものである。そのばあい、等価形態の商品の使用価値は価値物であり、直接的交換可能性の形態にある。つまり使用価値が経済的形態規定そのものである。商品の使用価値は本来、価値の、経済的形態規定の担い手であるにすぎないものであり、商品の素材として、欲望の対象となるものである。だが、それが等価形態に位置することによって経済的

10

阪南論集第10巻第1号

形態規定そのもの、社会的生産関係そのものを表示しているのである。これは「廻り道」の論理¹⁵⁾によって、周知のものであるが、欲望の対象である素材が価値物であり、直接的交換可能性の形態、つまり経済的形態規定そのものであることをみだすことは、価値形態論の中心をなすものである。これは交換欲望にもとづく商品交換の歴史的な拡大過程によって「形成」されるものではけっしてなく、商品の交換関係に含まれる価値関係を抽象し、分析しているマルクスによってこそなされたものである。

- 1) 宇野『経済学方法論』206頁。
- 2) 小林『流通形態論の研究』103-104頁。
- 3) 野口建彦「『資本形態』の導出及び展開方法」『経済集志』第42巻第4号。所収。同書 60頁。
- 4) 同書 79頁。
- 5) 同書 77頁。
- 6) 同書 70頁。
- 7) Friedrich Engels, *Karl Marx, "Zur Kritik der Politischen Ökonomie"*, M-E Werke, Bd. 13., S. 476.
- 8) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 20.
- 9) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 64.
- 10), 11) *ebenda*, S. 80.
- 12) *ebenda*, S. 174.
- 13) 野口 前掲書 71頁。
- 14) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 21.
- 15) 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』8頁。56頁。参照。

c) 単純な価値形態の必然性

ところで、宇野氏のばあい、形態Ⅰが価値形態論の最初になぜ位置づけられねばならないのか、という根拠が必ずしも明確でない。なぜなら、宇野氏の主張に従えば、商品所有者の交換欲望というものは種々なる使用価値にたいして向けられるものとするのが「当然である」¹⁾のだから、出発

貨幣の必然性(Ⅱ)

11

点はむしろ形態Ⅱとすべきであろう。注

注

大内秀明氏は「形態Ⅰを設定する必然性」²⁾を商品の使用価値の「異質性、特定の個別な性格」に求められて言われる。

「等価形態にたつ商品は、その使用価値量で価値を表現させられるがゆえに、特定の、したがって個別的な存在でなくてはならず、それゆえ単独の商品でなければならないわけである。」³⁾

だが、氏は商品の価値を「特定の使用価値を自己目的としない、全面的交換を要求する社会関係としての性格」⁴⁾としている以上、使用価値の個別性、異質性を主張したとしても「形態Ⅰを設定する必然性」は必ずしも説得的なものではない。むしろ氏の「価値」規定からすれば形態Ⅱ「全体的な価値形態」こそが唯一の価値形態とならないであろうか。⁵⁾

マルクスが、A「単純な、個別な、または偶然的な価値形態」（以下、マルクスのものは、A と略す—引用者）を価値形態論の出発点にすえたのはつぎのような理由からである。Aは、D「貨幣形態」（以下、マルクスのものは、D と略す）の萌芽形態であり、最もみすばらしく、かつ最も未展開な価値形態である。価値形態をその完成された形態であるDにおいてみるのではなく、最もみすばらしいAにおいて考察するのは、Dの本質が最も鋭くAにおいて示されているからにほかならない。Aにおいては、価値という社会的性質が唯一の他商品の使用価値で表現されるという「異様な事実」⁶⁾が鋭く提起されているからである。そしてそのばあい、等価形態の商品の使用価値が欲望の対象であるという意味を失って、価値の結晶であること、等価物であること、それでこそ使用価値は価値の表現手段となり、直接的に交換可能な形態となりうるものが、「抽象力を全面的に緊張させることによって」⁷⁾分析されるのである。ここに貨幣の萌芽形態であるAを分析する意義がある。Dはすべての商品の価値が唯一の商品金で表現される形態であるが、Dそのものをみていたのでは金が一般的等価物という社会的性質（一般的な直接的交換可能性）をもっているのは、金そのものの自然的属性であるかのように錯覚され、貨幣としての金の社会的

12

阪南論集 第10巻第1号

意味が看過されることになるからである。つまり金はその自然的諸属性である色彩美、不滅性、可分性ととも、あらゆる商品と直接的に交換されるものだという社会的性質を本来的にもっているかのようにみえる。つまり金は生れながらに全面的に交換可能な商品であるかにみえる。だが、こうした「金の謎性」⁸⁾あるいは「虚偽の仮象」⁹⁾は金自体に自然に備わるものではなく、商品と商品との社会的関係から生ずるものである。金が貨幣であるからすべての商品の価値が表現され、価値形態をとるのではなく、すべての商品が、それらの価値を唯一の商品・金で表現するからこそ商品・金は貨幣となり、全面的に交換可能な性格をもつのである。つまり価値の定在形態の完全な形態である一般的等価形態の地位を金という唯一の商品が独占したからこそ金は貨幣の性質をもつことができるのである。だから「金の謎性」をあばき、「虚偽の仮象」の本質をみ究めるためには、金にまといつく物神性から我々は解放される必要がある。そうとするならば、価値表現は商品と貨幣との関係においてではなく、商品と商品との社会的関係においてみなければならぬ。そしてそのばあい商品と商品との社会的関係を純粹に考察するためには諸商品によるそれではなく、一商品と唯一の他商品との価値関係においてそれをみなければならぬ。したがって二商品の価値関係に含まれている価値表現において、等価形態の商品がどのようにして等価物であり、直接的な交換可能性という形態を獲得するかを考察しなければならないことは自明のものとなるであろう。

だから社会的なものとしての商品の価値が「いかにして」他商品の使用価値で表現されるか、という形に問題を純化するためには、D「貨幣形態」においてではなく、またC「一般的価値形態」やB「全体的な価値形態」ではなくて、Dの原基形態であるA「単純な価値形態」においてみなければならぬ。つまりAはDの本質である。ここに価値形態論においてAが最初に位置づけられねばならない必然性があるのである。

マルクスはAとDの関係についてつぎのように述べている。

貨幣の必然性(Ⅱ)

13

「20エルレのリンネル＝1着の上着 あるいは、20エルレのリンネルは1着の上着に値する、という(形態の——引用者)代りに、

20エルレのリンネル＝2ポンド・スターリング あるいは、20エルレのリンネルは2ポンド・スターリングに値する、という形態を置き換えるならば、ひと目で、貨幣形態は商品の単純な価値形態の、したがって労働生産物の単純な商品形態の、より一層発展した姿態、以外のほかは全く何もでもない、ということがわかる。貨幣形態は発展した商品形態にほかならないから、それは明らかに単純な商品形態より生みだされたものである。したがって、単純な商品形態が理解されると、20エルレのリンネル＝1着の上着、という単純な商品形態が、20エルレのリンネル＝2ポンド・スターリング という姿態をとるために経過しなければならない変態の系列を考察することがなお残るだけである。」¹⁰⁾

このように、Dは発展した単純な商品形態であるのだから、貨幣としての金をもつ一般的な直接的交換可能性の形態は、Aにおいてこそみいだされねばならないのである。つまり「単純な商品形態は貨幣形態の秘密」¹¹⁾であるのだから、Aの等価形態の商品の価値が価値物であること、直接的な交換可能性にあることをみいだすことこそ「貨幣の秘密」をとくために重要なことなのである。

ところが、宇野氏はあくまで欲望を考慮しなければ等価形態の商品の使用価値は理解できない、とされて言われる。

「マルクスにあっては等価物は、単に、相対的価値形態にある商品に対してその使用価値を異にする価値の担い手として認められるにすぎない。それは一商品の価値を他の商品の使用価値で表示するというものではない。半着の上衣という使用価値のありえないことはいうまでもないであろう。マルクスはここですでに上衣をも貨幣としての金と同様に直接その使用価値が対象とせられるものでないかの如くに考えているのである。」¹²⁾

商品の使用価値は欲望の対象であるにもかかわらず、価値形態論におい

14

阪南論集 第10巻第1号

ては、Aにおいても、Dと同様に、等価形態の商品は「直接その使用価値が対象とせられるものでない」ことをみいだすこと、つまりAにおいて貨幣性質をみることこそ重要であり、困難なことである。マルクスが「われわれはここで、価値形態の理解を妨げる一切の困難の軸点に立っている」¹³⁾としているのも、欲望の対象である使用価値が価値の直接的な定在であることを把握する困難を指摘しているのである。宇野氏のように「直接その使用価値が対象とせられるもの」であるとすれば、価値表現は欲望の表現となり、等価形態の商品の貨幣との同一性が全く見過されることとなるのである。

- 1) 宇野『講座原論』40頁。
- 2) 大内『価値論の形成』187頁。
- 3) 同書 193頁。
- 4) 同書 192頁。
- 5) 同書 206-207頁。参照。および、鎌倉孝夫『資本論とマルクス主義』河出書房新社。昭和46年。148-149頁。参照。
- 6) 久留間敏造『価値形態論と交換過程論』105頁。
- 7) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 15.
- 8) *ebenda*, S. 775.
- 9) *ebenda*, S. 54.
- 10) *ebenda*, S. 776.
- 11) *ebenda*, S. 783.
- 12) 宇野『経済学方法論』195頁。
- 13) K. Marx, *a. a. O.*, S. 19.

d) マルクスの移行の動力ニ 価値表現の不充分性

さて、以上みたように、価値形態は交換欲望の表現とは無縁のものであるから、その移行も当然のことではあるが、欲望の拡大ではなくて、価値形態そのもののもつ矛盾を動力としてなされねばならない。その矛盾はいかなるものであろうか。つぎにそれをみることにしよう。マルクスはAから

貨幣の必然性(Ⅱ)

15

Bへの移行を、Aそのものに含まれている内在的矛盾によっておこなっている。商品の価値は私的所有と社会的分業にもとづく商品世界に独自の社会的性格を表示するものであり、普遍的な交換妥当力である。「価値としては、すべての商品は質的にひとしく、ただ量的にのみ区別されているから、一定の量的比率でたがいに計量しあい、代りあう（交換され、相互に兌換することができる）。価値とは商品の社会的関係であり、商品の経済的質である。」¹⁾つまり価値として商品は、他のすべての商品と同等であり、交換可能なものである。したがって、商品の価値形態も当然に他のすべての商品にたいする「質的同等性および量的比率性の関係におく形態」²⁾でなければならぬ。ところが、Aは一商品の価値がただ一つの他の商品で表現される価値形態である。だからAは「明らかに、商品の価値を全く限られたもの、一面的なものとして表現するだけである。」³⁾つまりAは普遍的な社会性である価値の性格を表現する形態としては「不[・]充[・]分[・]さ」⁴⁾をもっている。ここに価値概念とその表現形態（定在様式）との矛盾がある。だからAは、価値概念に照応するより進んだ価値形態へ移行せざるをえない。

それと同時に、Aは自分自身の矛盾を解決する形態へ移行しうる可能性・条件をもっている。Aは一商品の価値がただ一つの他の商品によって表現される価値形態である。そのばあい等価形態の商品はどのような種類のものであってもよく、ただ唯一の他のものでありさえすればよい。なぜなら社会的な交換妥当力である価値を表現するためには、その表現手段となる商品の種類は問題となりえないからである。つまり、いずれの商品で価値が表現されるかは偶然的である。その意味でAにおいても交換欲望の表現と価値表現との区別が明確になされているのである。

マルクスはBへの移行の条件をつぎのように述べている。

「リンネルが一つの価値関係をこの他の商品種類と結ぶか、あの他の商品種類と結ぶかに応じて、リンネルの種々なる単純な相対的価値表現が生ずる。可能性からいえば、リンネルはそれと異なる種類の商品が存在す

16

阪南論集第10巻第1号

るのとちょうど同じだけの種々なる単純な価値表現をもつのである。したがって事実上は、リンネルの完全な相対的価値表現は、個別化された単純な相対的価値表現にではなくて、リンネルの単純な相対的価値諸表現の総計にある。」⁵⁾

このように、Aは自分自身のうちにより進んだ価値形態へ移行しうる可能性をもっている。だから、AはBへ移行せざるをえない不可避性と移行しうる可能性・条件とをあわせもつことによって移行を実現し、A自身のもつ矛盾を解決しているのである。つまり、Aは価値の概念に照して価値の表現形態としては、不[・]充[・]分[・]である。この不[・]充[・]分[・]性（矛盾）が移行の動力である。それと同時に、A自身が、より完全に価値の表現される形態へ移行しうる可能性をもっている。だから、矛盾と同時にその矛盾を解決する可能性をもつことによって移行が実現されるのである。

したがって、AからBへの移行は価値形態そのものの孕む矛盾を動力として実現されている。だから価値形態とは無縁のものであり、外的なものである宇野氏等の「交換欲望」⁶⁾や「交換性向」⁷⁾の拡大、あるいは商品所有者の「日常的欲望」から「奢侈的欲望」への欲望の変化⁸⁾、あるいは価値＝「全面的に交換を要求する商品の性格」の強調による「展開」⁹⁾、あるいは等価商品の「偶然」性にもとづく価値表現の「不[・]充[・]分[・]性」つまり「矛盾の設定」¹⁰⁾、あるいは「諸商品が相互に直接に交換されうる形態をもたない」¹¹⁾矛盾、等々を動力として形態Ⅱへ移行することは、価値形態そのものを分析し、そこに矛盾をみだし、その矛盾を動力として移行するのは全く異質のものである。つまり、宇野氏等の移行の動力は商品所有者の「素材に対する関心」あるいは日常的意識にもとづくものであり、価値形態の移行とはいえず、誤りであるといえよう。

1) K. Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, S. 59.

2) ditto, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 776.

3) *ebenda*, S. 23.

貨幣の必然性(Ⅱ)

17

- 4) ditto, *Das Kapital*, Buch I., M-E Werke, Bd. 23., S. 76.
- 5) ditto, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 777.
- 6) 宇野『講座原論』40頁。
- 7) 小林『流通形態論の研究』108頁。
- 8) 永谷『資本主義の基礎形態』107-108頁。
- 9) 大内『価値論の形成』204-207頁。
- 10) 鈴木『価値論論争』188頁。255-257頁。
- 11) 中野『価値形態論』328-329頁。

e) 宇野氏の形態Ⅰは形態Ⅰの矛盾を解決しうるか？

さて、宇野氏等は形態Ⅰから形態Ⅱへの移行を「交換欲望」の拡大にもとづいておこなった。そのばあい、形態Ⅱは形態Ⅰの矛盾を解決するものとして理解されているのであろうか。つぎに検討することにしよう。

形態Ⅰは氏等によるとつぎのようなものである。すなわち一商品の価値はその商品所有者の他の一商品の使用価値に対する交換欲望として表現されるものである。そして形態Ⅰの矛盾・不充足性は商品の価値としての同質性が単一の商品にとどまらず、種々の商品にまで拡大しなければならないのに、単一の商品に限定されていることにある。そこでこの矛盾は商品所有者の他の諸商品に対する交換欲望の拡大にもとづいて解決される。したがって、宇野氏の形態Ⅱはつぎのようなものである。

「リンネル20ヤール=1着の上衣

リンネル10ヤール=5ポンドの茶

リンネル40ヤール=1トンの鉄

リンネルxヤール=y量のA商品」¹⁾

このように氏によると形態Ⅱにおいては、リンネルの価値は商品所有者の欲望にもとづいて、上衣ばかりでなく茶、鉄などの使用価値によっても表現される。だから「リンネルの価値そのものはなんらかの商品の特定の使

18

阪南論集 第10巻第1号

用価値形態には無頓着であることが明らかとなる。」²⁾したがって形態Ⅱは、形態Ⅰの矛盾、つまり「リンネルは上衣以外の商品とも価値としては同質でありうる」³⁾にもかかわらず上衣だけでしか表現されないという矛盾を解決している。

ところで、氏によると価値表現は交換欲望にもとづくこと、つまり「おのれの欲する一定量の他の商品にたいしてならリンネルのいくばくかを提供してもよい」⁴⁾ということであるのだから、形態Ⅱといえども価値表現は交換欲望から解放されているわけではない。だから、はたして「リンネルの価値そのものはなんらかの商品の特定の使用価値形態には無頓着であることが明らかとなる」と言えるであろうか。疑問である。そして氏自身「拡大された価値形態も、リンネルの価値を商品界のすべての商品によって表現するわけではない」⁵⁾とも言われているからである。つまり氏のばあい、けっして「無頓着」とはなりえないものである。「無頓着」を形態Ⅰにおいてみいだすことにこそ価値形態論を論及する意義があるのであるが、形態Ⅰ、Ⅱを欲望の表現とされるかぎりそれは困難である。

さらに氏は形態Ⅱの特徴について言われる。

「リンネルは、その価値を種々の商品の使用価値であらわすにしても、一定の価値をもっていることを明らかにする。なぜならば、拡大された価値形態で、リンネル所有者の主観的評価によるにしても、リンネルの価値が、5ポンドの茶にたいしてはリンネル10ヤールを、1トンの鉄にたいしてはリンネル40ヤールを提供する等々という形で表現されれば、リンネルの価値は交換されるにきぎだって、一定の大きさをもつがゆえに、他の種々の商品の異なった使用価値量で表現されうることになるからである。」⁶⁾

このように、形態Ⅱは一商品の価値が多くの商品の使用価値で表現される価値形態であるから、その商品の価値は「一定の大きさをもつ」ことが明らかであると言われる。氏がこう主張されるのは、氏の「愛用」⁷⁾される、マルクスの商品の交換が共同体と共同体との間ではじまり、交換が拡大さ

貨幣の必然性(Ⅱ)

19

れるにつれて、交換比率が欲望から離れて客観的な商品の価値そのものにもとづくようになることを、つまり歴史的な商品交換の拡大過程を想定されるからであろう。

だが、氏のばあい一商品の価値はその商品所有者の交換欲望にもとづく「一方的な申出」⁸⁾として表現されるものである以上、その商品の「価値は交換されるにすぎだつて、一定の大きさをもつ」と言いうるかどうか、きわめて疑問である。そもそも氏は価値の量的規定を最初に与えられていないのであるから、形態Ⅱで突然、価値は「一定の大きさをもつ」と言われてもならん論証されたものではない。氏は商品の価値の量的規定についてつぎのように言われている。「それら(諸商品——引用者)がいずれも金何円という価格をもっていることから明らかなように、使用価値のちがいにもかかわらず、質的に一様で量的に異なるにすぎない、という一面をその基本的規定としている。このような同質性が、商品交換の基準となる、その価値である。」⁹⁾このように商品の価値量は、実体規定にもとづくものではなくて、価格のような「同質性」と主張されるにすぎず、「商品交換の基準」となる量的規定が全く見出されないのである。だから「リンネルの価値は交換されるにすぎだつて、一定の大きさをもつ」などとほけつて言えないであろう。そうであるからこそ、氏は価値形態を他商品の使用価値に対する商品所有者の交換欲望の表現とみたのではなかったのであろうか。

このように、価値性格および価値量という両面から考察してみると、氏の形態Ⅱは形態Ⅰの矛盾を解決しているとは言えない。そもそも、氏の形態Ⅰと形態Ⅱとの区別はどこに存するのであろうか。一商品に対する欲望から多数の商品に対する欲望へとというように単に欲望が拡大した、いわゆる程度の差の議論にすぎないものではないであろうか。^注

注

小林弥六氏は、形態Ⅱの特徴をつぎのように言われる。「リンネルの価値性格、

20

阪南論集 第1巻第10号

すなわち他商品との同質性がいっそう普遍的・客観的なものとしてあらわれるようになり、価値表現の偶然的性格がうすらいでくる。また等価物が複数であるために、個々の価値表現がたがいに規制しあう可能性もでてくるので、価値の量的表現もしだいに客観的妥当性を獲得するようになる。」¹⁰⁾

小林氏はさきに商品の価値表現を、商品所有者の交換したいと欲する商品に対する「主観的で一方的な意志表示である」¹¹⁾ものとしており、欲望の意義を強調されている。そして形態Ⅱにおいても「交換の対象物」は商品「所有者の要求する商品種類だけに限定されており、すべての商品種類を含むわけではない」¹²⁾と言われる以上、宇野氏に対すると同様の疑問が言いうる。

つまり欲望にもとづくものであるから、「価値性格」が「普遍的・客観的なものとしてあらわれるようになる」かどうか、あるいはまた「価値の量的表現」が「客観的妥当性を獲得するようになる」かどうか疑問である。

さらに価値形態を「価値としての実現の機構をつくりだす」¹³⁾ものとする氏は形態Ⅱのほうが形態Ⅰよりも「価値としての実現の可能性はいっそう大きくなる」として言われる。

「なぜならこんどは上衣だけでなく茶、鉄などの所有者のいずれかが交換の意志表示をおこなえば交換が成立するからである。またそれらの商品もおおの拡大された価値形態をもつならば、交換の成立する可能性はさらに大きくなる。」¹⁴⁾

つまり、氏は価値表現を交換欲望の表現とするのであるから、商品所有者の欲望の対象物が増せば増すほど、相手方の商品所有者が自己の商品に対して、交換を欲する可能性が大きくなるとするのである。だが、すでにみたように、そもそも商品の価値表現は商品所有者の欲望の表現ではありえないし、商品所有者の「交換の意志表示」などが入りうる余地はない。B「全体的な価値形態」では、一商品の価値がさまざまな商品で表現される価値の形態そのものを純粹に分析して、価値の概念に対してその表現形態が充分なものか、どうかを考察しているのであつて、「交換の成立する可能性」が大きいか、小さいかを問題としているのではない。つまりBは商品所有者の欲望が重要な役割を演ずる交換過程をその対象としているのではない。氏は両者を混同し、同一視しているのである。

永谷清氏は形態Ⅱの意義を形態Ⅰ「にあった価値表現における制約から次第に解放されてくる」¹⁵⁾ことに求められる。つまり「単純形態の場合には、日常的欲望に制約されて、全部の垂麻布の価値表現が必ずしも保証されないのに、この意味での拡大形態になると残り全部も価値表現されうるようになってくる。

貨幣の必然性(Ⅱ)

21

この意味で、単純形態とは相違して価値表現における欲望の制約から次第に解放されつつあるのはたしかである。『商品価値は、自らの姿を現わす使用価値の特別の形態に対して無関心』であることは、この形態でもありえないが、『自らの姿を現わす使用価値』が奢侈的商品に変化してゆき、日常的な直接的な欲望から解放されてゆかぎりでは、『無関心』にすこしずつ近づいているのである。価値表現の発展とはこのことである。」¹⁶⁾ このように「日常的な直接的な欲望」から「奢侈的欲望」へと欲望が変化することに形態Ⅱの意義をみいだすのである。だが、これは欲望の変化を述べたものにすぎず、けっして欲望そのものからの価値表現の「解放」を意味しない。だから、氏のばあいとえ「奢侈的欲望」に欲望が変化するにしても、けっして「『無関心』にすこしずつ近づき」えないのである。マルクスはAにおいても抽象力を全面的に駆使して、商品の価値はその商品の使用価値とは異なるものであることを、唯一の他商品によって明らかにしている。だが、その他商品が唯一であることによって、Aの形態そのものからは価値表現と欲望の表現の区別が明らかでなく、したがってまた、その唯一の他商品によって価値を表現する商品の使用価値と価値との区別は明示的に表現されているわけではない。ところがBでは一商品の価値が無数の他商品で表現される価値形態だから、商品の価値はそれがとる使用価値の形態とは「無縁」のものであることが形態そのものによって示されている。つまりAをみBをみることにより、Aに含まれている商品の使用価値と価値の区別の外見上のあいまいさがBにおいては払拭され、価値表現は使用価値にたいする欲望の表現とは全く異なるものであることが明らかになるのである。ところが、氏のばあい欲望の表現と価値表現とが同一視されているため、Bの積極的な意義が欲望の変化というような極めて皮相な問題に「発展」してしまったのである。ここにも対象を抽象し、分析することを放棄すれば、いかにトリビアルな問題に関心が向いていくかという端的な見本がある。

大内秀明氏は「形態Ⅱの特徴を、つぎのように理解して」いる。「第一に、全面的交換を要求する、使用価値を自己目的としない社会関係を、積極的に表現する価値形態であり、それゆえに第二に、無限の使用価値種類によって表現されなければならない。したがって第三に、それら無数の使用価値種類にたいして、『選択』をおこなっている形態であるとともに、第四には、量的規定も偶然的でなく一定の量的関係をもつ価値形態である。」¹⁷⁾

氏の価値規定からして、形態Ⅱの特徴の「第一」、「第二」は当然のことであろう。だが、特徴の「第三」、「第四」については疑問がある。まず「有利なものを選択する」¹⁸⁾ 基準は何にもとづいているのであろうか。また「一定の量的関係」は何によって与えられるものであろうか。氏はこうした疑問を予

22

阪南論集 第10巻第1号

想してか、つぎのように言われている。商品の価値が「使用価値を自己目的とせず、どんな使用価値であろうと無差別に交換を要求することは、使用価値の内容とは無関係に商品を選択することであり、その選択にあたっては、たえずあらゆる商品を使用価値としての異質性とは別に比較することにほかならない。そして、比較するからには、とうぜん量的な比較であって、量的規定性をともなっているといっているからである。しかも、この量的比較をともなう価値対象性にもとづいて価値増殖する運動体としての資本も展開されるのであり、資本は、どんな使用価値的内容をもつ商品であろうと、また、いかなる生産部門であろうと、無差別に利潤率を中心として選択し移動する。したがって価値は、価値増殖の基礎にあるものであり、商品は、資本に前提される基礎的な範疇として理解できるわけである。」¹⁹⁾

つまり、「有利なものを選択する」基準は、「商品を使用価値としての異質性とは別に比較すること」にある。だが、この「比較」は誰がどのようにしておこなうのか。つまり価値の実体規定にもとづかないで、しかも「使用価値としての異質性とは別に比較すること」は可能なのであろうか。さらに氏は、上述の価値規定にもとづいて、資本を「利潤率を中心として選択し移動する」と規定される。氏の主張は、資本の規定から価値の規定を考察すれば理解が容易となる。氏についても言えることは、価値形態論が価値の表現形態、つまり社会的なものである商品の価値が「いかにして」他商品で表現されるか、ということが中心的な課題であることが忘れられ、それとは全く別のものである資本の規定に類似した課題を価値形態論で解決しようとするのである。

鈴木鴻一郎氏は形態Ⅰの「『偶然的』な性格」に対して、形態Ⅱには「『選択』の余地が入って」くるとして言われる。

「『拡大された価値形態』にあつては、『リンネル商品』の価値は、すでに、『上衣』とか、『茶』とか、『コーヒー』とかいう特定の使用価値に等しいものとなっているのであり、『偶然』ではなくて『選択』の余地が入ってきているのである。」²⁰⁾

形態Ⅰと形態Ⅱとの区別を、等価形態の商品の「偶然的」な性格と「特定化」つまり「選択」しうる性格とによっておこなうことは、等価形態の商品の使用価値の種類の「一」か「多」かにもとづくものであり、価値形態論の根本問題を看過するものであるにすぎない。形態Ⅰと形態Ⅱとの区別は価値概念に対して価値の表現形態が不十分であるか、どうかでこそ決められねばならない。

さて、マルクスはどのようにBをみているのであろうか。BはA自身のもつ矛盾を解決する価値形態である。すなわち一商品の価値が商品世界の無

貨幣の必然性(Ⅱ)

23

数の他商品で表現される価値形態であり、その商品は、「商品世界と社会的関係を結んでいる。」²¹⁾だからBは無差別な抽象の人間労働の結晶である価値の概念に照応した価値形態である。それは価値としてはすべての商品は同等なものであり、直接的に交換可能な性格つまり商品の社会性を表現する形態である。したがって、Bは「他のすべての商品に対して質的同等性および量的比率性の関係におく」²²⁾価値形態であるのだから、「価値を全く限られたもの、一面的なもの」²³⁾として表現するAの矛盾を解決している。Aは、一商品の価値がその商品の使用価値とは異なるものであることを、一商品の価値は他の一商品に等しい、ということによって示す価値形態である。そしてAは等価形態には唯一の商品しか立たないのであるから、抽象力を全面的に働かさなにかぎり、等価形態の他の一商品は欲望の対象だから等しく置かれているとする誤解が生じ、等価形態に立つ商品の使用価値の独自の社会的性格が看過されることになりかねない。ところが、Bは等価形態には無数の他商品が立つことになるのであるから、その表現形態そのものからして価値の形態となる他の諸商品の使用価値は欲望の対象とは無関係であることが示されるのである。このようにBはあらゆる商品と同等なものであるという価値の性格を表現するのに妥当なより展開された価値形態である。

- 1), 2) 宇野『講座原論』41頁。
- 3) 同書 38頁。
- 4) 同書 41頁。
- 5) 同書 42頁。
- 6) 同書 41-42頁。
- 7) 宇野『経済学の効用』東京大学出版会。1972年。12頁。
- 8) 宇野『経済学方法論』204頁。
- 9) 宇野『講座原論』28頁。
- 10) 小林『流通形態論の研究』109頁。
- 11) 同書 99頁。

24

阪南論集 第10巻第1号

- 12) 同書 108頁。
- 13) 同書 100頁。
- 14) 同書 109頁。
- 15) 永谷『資本主義の基礎形態』106頁。
- 16) 同書 108頁。
- 17) 大内『価値論の形成』206-207頁。
- 18) 同書 205頁。
- 19) 同書 172頁。
- 20) 鈴木『価値論論争』187頁。なお、170頁。257頁。参照。
- 21) K. Marx, *Das Kapital*, I, 1. Auflage, S. 777.
- 22) *ebenda*, S. 776.
- 23) *ebenda*, S. 23.

1974年5月30日 (未完)